

# 雑誌「驢馬」における芥川龍之介と中野重治 (承前)

菊 地 弘

## 三

堀辰雄は先にあげた『中野重治と僕』(昭和五・七「詩神」)の中で、中野はすでに『浪』<sup>註1</sup>とか『豪傑』というすばらしい詩を書いていたと述べている。ところで一九七六年九月二〇日刊筑摩書房版『中野重治全集第一巻』の解題によると、『浪』は一九二五年五月雑誌『裸像』(四号)に発表、『豪傑』は初出未詳とあつて、ナウカ社版詩集にはじめて収められたとある。中野の最初の詩集はナツプ社版で、一九三一年一〇月五日刊、五三篇の詩が収められているとある。この詩集と内容はほとんど同じの第二の詩集がナウカ社版で、一九三五年二月一四日刊、五五篇収められたとある。『豪傑』はこの時はじめて収録されたとなつている。しかし堀辰雄は前述したように一九三〇年七

月の発行の「詩神」に『浪』と『豪傑』はすばらしい抒情詩であると讃えている。そうなると『豪傑』は一九三〇年七月以前に書かれていたことになる。

未発表書簡集『愛しき者へ』上 中野重治<sup>註2</sup>に収められている原まさの宛の書簡(一九三四・三・一)に

昨日鈴子のテガミがとどいた。二十四日出しの手紙だった。彼女にもずいぶんながく手紙をかいていないのだが、なかなかいい手紙だった。俺がずっと昔かいた「豪傑」という詩の原稿が出て来たとかいてあった。その詩は俺もわり合いよくおぼえてる詩で(文句をおぼえてるわけではないが)、俺のものとしてはよく出来たものなのだ。

出て来た原稿は出来上りの原稿なのかどうか分らぬが、豪傑が、種族の重いひきうすをまわして、年よりになり、声が遠くまできこえ、死んで天にのぼって星になった——という

風にかいてあるなら完成した時の原稿だと思つとあり、さらにつづけて

もいつべん言つてもいいが、あれは俺の詩としてはよく出来たもののように思う。おれ自身はどこからみても豪傑でなく、豪傑をたつとぶことを知つているとも言えないが、豪傑をたつとびたいとは思つていたのだ。今もそう思つてゐる。

その限りで詩人としての資格があるかもしれぬ。(傍点菊地)とある。またさらに中野鈴子宛書簡(一九三四・三・三二)のなかでは、

「豪傑」という詩は、まさのにも言つておいたが、写しをとつて失わぬようにしておいてほしい。(中略)「豪傑」は俺の詩集(?)に入れるようにしてもらいたい。マサノにそう言つておいて下さい

と書いている。そこから知られることは、中野は詩「豪傑」を鮮明に覚えており、詩としてよく出来てゐると自信を有してゐたことである。また「豪傑をたつとびたい」とは思つてゐたのだ。この文からは、中野の資質が読みとれるのである。

「裸像」は一九二五年一月に創刊されている。中野は毎号詩を載せてゐる。芥川龍之介は、室生犀星、または堀辰雄から、この雑誌や中野のことを聞き知つてゐたことは考えられる。

『浪』は

人も犬もゐなくて浪だけがある

浪は白浪でたえまなく崩れてゐる

にはじまり、寂寞をイメージさせる磯の光景が歌われている。詩人は「人も犬もゐない」この磯に、不断にうち寄せては崩れる浪の状態に視点を据えている。この磯につづく「北の方にも国がある／南の方にも国がある」、浪はそこでもくずれてゐる。くずれる浪の状態の繰り返しが続いてゐる。指摘があるように、浪はそこでもくずれてゐる、その「崩れてゐる」という表現に詩人の抒情がある。だが「意思」(伊藤信吉)の見えない漠とした詩である。現実人は人も犬もゐる。それを「人も犬もゐるのか。」

さて『豪傑』は二四行の詩である。

むかし豪傑といふものがゐた

彼は書物をよみ

嘘をつかず

みなりを気にせず

わざを磨くために飯を食はなかつた

後指をさゝれると腹を切つた

恥しい心が生じると腹を切つた

かいしやくは友達にして貰つた

彼は錢をためる代りに溜めなかつた

つらいといふ代りに敵を殺した

恩を感じると胸のなかにたゝんで置いて

あとでその人のために敵を殺した

いくらでも殺した

それからおのれも死んだ

生きのびたものはみな白髪になつた

白髪はまつ白であつた

しわが深く眉毛がながく

そして声はまだ遠くまで聞えた

彼は心を鍛えるために自分の心臓をふるごにした

そして種族の重いひき白をしづかにまはした

重いひき白をしづかにまはし

そしてやがて死んだ

そして人は 死んだ豪傑を 天の星から見分けることが

出来なかつた

この詩を北川透氏は「ある戒律のために自分のすべての行為を自己規制している人間の姿であり、「徹底的に禁欲的であり、人を殺すという点では攻撃的である」とし、「その非合理の二面性こそは、戒律に殉じた生の表裏な關係を示すもの」と評言している。

むかし豪傑といふものがあつた

と、過去形ではじまつている。今のことを詠んでいない。そして「豪傑」は自分に道徳を課して、きびしく生きた、志士的に生きた、ひとである。「生きのびた」豪傑は「みな白髪になつた／白髪はまつ白であつた」と純粹に志士的な氣質に徹した豪傑である。「重いひき白をしづかにまはし」てひとびとを引つ

張つてゆく、その雄姿は土俗的で氏族を導いてゆくイメージを想起させる。しかしこの詩からどのような導く「意思」が浮かびあがつてくるかと問うと、行動を生む「意思」は読めない。道徳によつて自らを律した在りし日の豪傑の姿である。自分をきびしく律する表現は中野の詩によくみられる方法であり、中野の資質が窺える。

#### 四

中野重治の「驢馬」に発表した作品をあげておく。

煙草や

北見の海岸

鶏頭

ハイネ書簡 一 フリートトリヒ シュタインマン宛

以上創刊号

夜明け前のさよなら

ハイネ書簡 二 フリートトリヒ シュタインマン宛

以上第二号

詩に関する二三の断片

東京帝国大学生

思へる

ま夜中のせみ

以上第三号

新聞記者  
啄木に関する一断片

以上第七号

ゴルキへのレニンの手紙

新任大使着京の圖

日々

ハイネ書簡 三 カール・イムマン、ン宛

以上第四号

萬年大学生の作者に  
ポール・クローデル  
詩に関する二三の断片

以上第八号

機関車

歌

機関車

掃除

縣知事

無政府主義者

ハイネ書簡 四 フリートトリヒ ラスマン宛

以上第五号

死んだ一人  
彼が書き残した言葉

以上第九号

郷土望景詩に現れた憤怒について

以上第六号

ハインリヒ・ハイネの言葉 Deutschland の序文から

以上第十号

帝国ホテル

(一)  
(二)

昭和三年五月六日臨時発行「驢馬」第拾貳号の最終号には中野は作品を発表していない。

芥川の書いたものから、「驢馬」第六号(大正一五・一〇・六)の評論「郷土望景詩に現われた憤怒について」と、第八号(昭和二・一・一)の詩「萬年大学生の作者に」を芥川が読んだことは明らかだが、他に中野のどの作品を読んだかははっきりしない。

『萬年大学生の作者に』は、(萬年大学生は改造十一月号所載久米正雄氏の作品。五百木はその作中の一人物。久米氏は彼に深い同情と哀憐とを寄せられた。)という前書があつて、

それが五百木であつたとしても

の一行からはじまる一七行の詩である。ところで久米正雄の小説『萬年大学生』の梗概をいうと、中年の作家である私は、かつて私と同じ文学志望の学生であつた五百木にめぐり合う。五百木は進路をあれこれ変えた末、経済学部<sup>註</sup>の学生になつてゐる。五百木は私のところに原稿を置いてゆく、それを発表して原稿料を得たいということだったが、その歌も戯曲も稚拙でどうにもならなかつたので、私は五百木の真意をはかりかね、放つておいた。五百木はやがて帰郷して、郷里の新聞社や雑誌社から原稿を要請されてゐると手紙を寄越したので、私はホツとして原稿を返却する。それから一年ほど経て、私は、左翼的政治結社をつくり文書を秘密出版した学生たちが検挙されたという新聞記事を読み、五百木らしい名をその中に発見する。五百木にそのような道をとらせたことに私も責任があるかもしれないと思うが、(涙ぐましい例の微苦笑で)自分の氣持を和けてしま

うというものである。作中には、柳川保吉(芥川龍之介)、成田俊一(成瀬正一)、木村啓吉(菊池寛)が描かれている。このような作品を描いた久米正雄の態度に中野重治は不快を感じているようだ。涙ぐましい微苦笑という、心が痛むような表現をしながら、それはそれでもしかたがないさ、世の中そんなものだという、不徹底なあいまいな主人公「私」の態度に、中野は不快を覚えた。

だが君はサムラヒでない

君はたゞ「萬年大学生」の作者だ

君はたゞ萬年小僧だ

君はたゞおそろしいのだ

から推して、中野は久米のあいまいさが許せなかつたのであろう。許せないという中野の憤怒の念は先にあげた『豪傑』と共通するものがある。つまり自分を厳しく道義的に規制して生きることが好む体質からの久米批判なのである。そうした中野の道義性は例えれば次のような表現に顯れる。

僕らは仕事をせねばならぬ

そのために相談をせねばならぬ

『夜明け前のさよなら』

お前は歌ふな

お前は赤まゝの花やとんぼの羽根を歌ふな

風のさゝやきや女の髪の毛の匂ひを歌ふな

『機関車』の「歌」

いずれも詩の最初の二、三行であるが、当為または禁止の表現に体質が覗けるのである。

五

芥川龍之介は『文芸的な、餘りに文芸的な』の「十二 詩的精神」で

僕の詩的精神とは最も広い意味の抒情詩である。

という。そして「十四 白柳秀湖氏」のなかでは、

美は僕等の生活から何の關係もなしに生まれたものではない。僕等の祖先は焚火を愛し、林間に流れる水を愛し、肉を盛る土器を愛し、敵を打ち倒す棒を愛した。美はこれ等の生活の必要品(?)からおのづと生まれて来たのである。……と白柳秀湖の「僕の美学」を「尊敬に値するもの」として紹介し

僕はもう十数年前、或山中の宿に鹿の声を聞き、何かしみじみと人恋しさを感じた。あらゆる抒情詩はこの鹿の声に、——雌を呼ぶ雄の声に発したのであらう。

と書いている。芥川は甘い感情を、あるいはめめしい情を叫ぶ抒情詩をいうのではない。人間の生活感情に根ざした切迫した叫びこそ人の心を動かす抒情詩となる。つまり生活に根ざした

切迫した感情感覚が人の心を動かし、何かを生むような感動を覚えさせる詩となるというのである。生活に基層した切迫した感情感覚ということで「生活の詩」となり、「あらゆる抒情詩」という表現になる。しかし念をおしておかなければならないことは、芥川は「詩的精神とは最も広い意味の抒情詩」と、曖昧な表現をしていると思うかも知れないが、「鹿の声に」とあるように、また「二十八 國木田獨歩」のところで、独歩の詩は、花袋の「大河に近い」詩や「お花畑に似た」藤村の詩とは異なり、「もつと切迫してゐる」と強調していることなどと考えあわせてゆけば、「突き刺すような」(伊藤信吉)切迫した声で詠んだ「生活の詩」に抒情詩の本質的な美しさを見て、力説していることなのである。そのような抒情性を胎することがまた芥川の謂う詩的精神なのである。

六

「驢馬」創刊号(大正一五・四・二)に載せた中野の詩「煙草や」と「北見の海岸」を見てゆこう。「煙草や」は、

その煙草やお寺のとなりにある  
美しい神さんが居て

煙草の差し出し方が大さうよい

上品な姉と弟の児供が居て

何時かなぞはオルガンを奏いて居た

それに

顔つきの大人しい血色のいゝ主人が居る

もつと立派な煙草やは千軒もあらう

そして僕も煙草を

いつもくよその店で買つてしまふ

しかし僕は

そのお寺のとりの煙草やを愛して居る

その小さな店に

僕のさぶしい好意を一人で寄せて居る

の全一四行から成る詩である。好意を寄せる（上品な姉）に向けて情は動くのであるが、煙草はいつもよその店で買う。羞恥心と拗とを内包した孤独な詩人の情が、へさぶしい好意を一人で寄せて居るに叫びとして刻まれている。しかし、切実な叫びがひそめられてはいるが、情を動かし胎する詩的抒情には実っていない。

が、『北見の海岸』は生活意識を内包した抒情詩である。

沖合はガスにうもれて居る

渚はびつしよりにぬれて居る

その濡れた渚に黒い人影が動いて居る

黒い人影は手網を提げて居る

黒い人影は手網をあげて乏しい獲物をたづねて居る

黒い人影は誰だらう

黒い人影はどこから来ただらう

獲物はいつも乏しからう

部落は定めし寒からう

そして妻子の間にも話の種が少なからう

そして彼の獲物は賣れようか

彼の手にも銭が残らうか

いゝえ

彼は黙つてこゝの海岸を北へ北へと進むだらう

手網を提げて

妻子を連れて

そして家畜も連れないうで

やがてはこゝを汽車が通るやうになるかも知れぬ

大きな建物が立つて

高い煙突から黒い煙が上るやうになるかも知れぬ

そしてその時

黒い人影はどこに居るだらう

彼の息子や娘はどこに居るだらう

彼らは病気をせぬだらうか

そして医者が居るだらうか

彼らは死なぬだらうか

黒い人影はどこから来ただらう

黒い人影は濡れて居る

黒い人影は濡れて居る

の三連からなる詩である。北の海の漁師を歌ったこの詩ですぐ  
気の付くことは「……だらう」の推測を同じ語形で繰り返す技  
法である。その技法に北川透氏のいう「作者の主観が現実とし  
て構成しようとしている意味」を見出すことはできる。繰り返す  
す技法に詩人の温かい優しい情が伝わってくる。詩人のイメー  
ジは漁師の生活の今の、将来の生活状態に踏み込んでゆく。  
「汽車が通るやうになるかも知れ」ない、「大きな建物が立つ」、  
「高い煙突から黒い煙が上る」と、近代的生产的な現実の到来  
する「風景」を描写する、しかし彼等はその恩恵に浴するであ  
らうか、詩人はスケプティックである。「黒い人影」のひたす  
ら漁を求め、「海岸を北へ北へと進む」辛い生活者の日々、  
「息子や娘はどこに居る」か、「病気はせぬ」か、「医者居る」  
か、「死なぬだらうか」と、詩人の眼は鋭く向いて問いかける。  
黒い影をひいている生活者に対する優しく温かい叫びをひそめて  
いる。辛い暗澹たる生活者「黒い人影は濡れて居る」と歌う抒  
情の核に、中野のヒューマニティが窺える。北の海の生活者を  
素材としてこれまでの日本で表現されなかった生活の詩を歌っ  
たのである。それは芥川の主張する抒情に合致するものである  
う。

秋の姿でたふれかゝる  
そのひゞきは奥ぶかく  
せまつた山の根にかなしく反響する  
がんじような汽車さへもためらひ勝ちに  
しぶきは窓がらすに霧のやうにも まつはつてくる  
と歌う。絶え間なく押し寄せるしらなみに、執拗にまつわつて  
拭いきれない寂しさを核にした抒情詩である。詩人の感情がに  
じみ出ている。それは『浪』にも共通している。  
人も犬もゐなくて浪だけがある  
浪は白浪でたえまなく崩れてゐる  
にはじまる全二四行の詩であるが、指摘されているように「崩  
れてゐる」のリフレインの手法、無限の繰り返しに響きに、内  
なる限りない寂しさを籠めている。「人も犬もゐない」「空漠  
とした」磯、その磯は「北の方につゞいてゐる」／＼と南の方  
にもつゞいてゐる／北の方にも国がある／南の方にも国があ  
る」と歌う。だがそこでも浪だけは崩れていると歌う中野は何  
を見凝ようとしているのか、  
風が吹いてゐる  
人も犬もゐない  
と歌って終つてしまふ。「人も犬もゐない」と強調する、そこ  
にただの磯の自然の風景とひととの関係交渉を越えた、詩人の  
ある切迫した感慨があるのだ、だが「意思」はイメージされて  
いない。『しらなみ』も『浪』も寂寥の虚白の心を歌っている。



それは感傷や詠歎を歌った抒情詩とは違う醒めた眼がある。しかし『北見の海岸』に見詰めた生活者を核とした抒情詩には及んでいない。

これらの詩に対して『夜明け前のさよなら』（第二号、大正十五・五・一）と『歌』（第五号、大正十五・九・一）は明らかに傾向詩である。

僕は仕事をせねばならぬ（傍点菊地）

ではじまる四連からなる『夜明け前のさよなら』は、『僕は』と連帯意識を強調し、『仕事をせねばならぬ』／＼のために相談をせねばならぬを道徳的な当為と信じ、プロレタリア運動を己れに義務として課す。運動の同調者の家で、六人の青年は二階で眠る。下には一組の夫婦と一人の赤ん坊とが眠っている。しかし、『僕は』六人の青年の経歴も知らないし、下の夫婦の名前も知らない。ただ〈仲間であることだけを知っている〉と歌う裡にはライフライクな人間は詠まれてこない。また『僕は』と『僕は』の間にプロレタリア戦士の連帯意識は読めても、誰だか、ひとは不明である。プロレタリア社会実現へ向かつて、『僕は綿密な打合せ』をし、『着々と仕事を運ぶ』気負った意識で、

夜明けは間もない

この四疊半よ

コードに吊されたおしめよ

煤けた裸の電球よ

セルロイドのおもちやよ  
貸布団よ

蚤よ

僕は君達にさよならを言ふ

その花を咲かせるために

僕らの花

下の夫婦の花

下の赤ん坊の花

それらの花を一時にはげしく咲かせるためにと歌う。が夜明けを告げるには少くともそういう生活者を同伴して歌われた生活の詩でなければならぬ。『僕は下の夫婦の名前を知らぬ』の関係では強い連帯は響いてこない。たがいに名を知らぬことが、検挙された場合などに備えて官憲の追求をせきとめるものであれば、それは政治運動の次元のことで、作品創造の行為は別である。己れに課す道義に押されて、夫婦や赤ん坊らの生活の詩を感じさせずにはおかない、詩としての響きは薄い。北川透氏の指摘のように「一組の夫婦と一人の赤ん坊が主格に組織されねばならなかつた」のであり、「夜明けは間もない」ということばも、それは単に規範の主観的願望をあらわしているだけであつて、客体としての現実とは関係がないのである。」<sup>註</sup>ということである。

『歌』もよく知られた詩である。

お前は歌ふな

お前は赤まゝの花やとんぼの羽根を歌ふな  
風のさゝやきや女の髪の毛の匂ひを歌ふな

すべてのひよわなもの

すべてのうそうそとしたもの

すべての物憂げなものを掻き去れ

すべての風情を擯斥せよ

もつぱら正直のところを

腹の足しになるところを

胸先を突き上げて来るぎりぎりのところを歌へ

たゝかれることによつて弾ね返る歌を

恥辱の底から勇気をくみ来る歌を

それらの歌々を

心臓をいぶし立て

咽喉をふくらまして

厳しい韻律に歌ひ上げよ

それらの歌々を

行く行く人々の胸廓にたゝき込め

凜とした響きのある詩である。が、言われているように作品の

構造が分離しているのである。「歌ふな」は禁止の表現、一〇

行目の〈歌へ〉からは当為の表現である。この詩も道義によつ

て己れを律してゆく姿勢は変つていない。そのなかで、赤まま

の花、とんぼの羽根、女の髪の毛の匂いなど、うそうそとした、

物憂げな、すべての風情を、習俗や生活感情を、月並の感覚で

歌うことを払拭して、胸に突きあげてくる歌を、はね返すよう  
な歌を、韻律高く歌えと訴えた詩なのである。中野は〈歌ふな〉  
の禁止から〈歌へ〉と当為の表現をしなければならなかつた裡  
には、禁止の意識から、切迫して胎する詩的抒情とその表現化  
を意識したことがあつたのであろう。詩人の心は、抒情を胎し  
て生活感情や感覚に表現を与えよ、感性の呼び声を与えよ、と  
歌つたのである。堀辰雄は「私の若い頃の友人だつた、一詩人  
が、彼自身もつと若くて、もつと元氣のよかつたとき、お前は  
歌ふな／お前は赤ままの花やとんぼの羽根を歌ふな／と高らかに  
歌つた」と書いて、

その素朴な詩句は、しかしながら私の裡に、云ひしれず複  
雑な感動をよび起した。私はその僅かな二行の裡にもその詩  
人の不幸な宿命をいつか見出してゐた。何故なら、その二行  
をもつて始められるその詩独特の美しさは、それは決してそ  
の詩人が赤ままの花や何かを歌ひ棄てたからではなく、い  
はばそれを歌ひ棄てようとして決意してゐるところに、——かへ  
つてこれを最後にと赤ままの花やその他のいぢらしいものを  
とり入れてゐるために——そこにパラドクシカルな、悲痛の  
美しさを生じさせてゐるのにちがひないのだつた。

——その読みもまた首肯できよう。

大きな図体と千貫の重量をもつ機関車の雄姿を「擬人化」  
(北川透) した力強い「機関車」(第五号、大正一五・九・一)

という詩であるが、詩の半ば以降で、

それが車軸をかき立てかき立てまはして行く時

町と村とをまつしぐらに馳けぬけて行くのを見るとき

われらの心臓はとどめ難くとどろき

われらの眼は抑へられがたく泪ぐむ

真鍮の文字板を掲げ

赤いラムプを下げ

常に煙をくゞつて

千人の生活を搬ぶもの

旗とシグナルとハンドルとによつて

輝く軌道の上を

全く統制のうちに馳けて行くもの

その律気者の大男の後姿に

われら今熱い手をあげる

とプロレタリアートを対象化し、その運動の賛歌としてゐる。

『夜明け前のさよなら』よりは作品の構造も整つて生活の詩となつてゐる。そしてまた〈律義者の大男〉に〈熱い手をあ〉げて応えるところに詩人の共感があり、連帯意識が如実に示されている。詩人のアイデアが投影している。芥川龍之介に遺稿『機関車を見ながら』（昭和二・九、「サンデー毎日」という小品がある。擬人化した機関車である。機関車に威力を感じ機関車のように激しい生命を願望する。われわれは軌道の上を走る機関車と同じである。ムッソリニ、マクベス、小春治兵衛もやは

り機関車である。自由に突進したいという欲望を持つが、軌道走っていることで悲劇になり喜劇にもなる。しかし〈大抵の機関車は兎に角全然さびはてるまで走ることを断念しない。あらゆる機関車の外見上の荘嚴はそこにかゝやいてゐるであらう。丁度油を塗つた鉄のやうに。……〉と人生の栄光——起伏と多層——を見てゐる。自由に走りまわりたいと思つても軌道を走らねばならないという束縛があり、起伏があるという人間社会の生を芥川はきちんと見詰めて捉えている。芥川の小品と中野の詩を同列に扱えないことを知つたうえで、擬人化した機関車を歌う中野より、機関車に人間の生を思う芥川に柔軟で潤達な眼を知るのである。

## 七

中野は評論『郷土望景詩に現れた憤怒について』（第六号、大正一五・一〇・六）を載せてゐる。そこで中野はいう。島崎藤村は感情の解放を歌い上げたが、感情を抑圧してきたものへは立ちむかわなかつた。意識して己れの感情を歌つたのではなく、主張、主観的なものがない。まず歌つたのである。朔太郎も感情の解放を、新しい感情を歌つたが、その感情には〈辛い、淋しい、不幸な、我慢のならないもの〉を含んでいた。しかし『月に吠える』『青猫』の殆ど全作品においてその感情がどこから来たか明らかにならなかつた。が、『郷土望景詩』には憤怒が

洩されている。〈望景詩十篇を以て、逃避であつた昨日の「超俗性」(氏の言葉によれば)から進撃である「叛逆性」(氏の言葉によれば)への出発を示されたかに思はれる。〉(小都市のよき家庭に育つた)氏は〈それ故に唯一的の孤独の詩人〉となり、またこの〈小都市〉は孤独に住む氏を圧迫した。それが氏を「超俗的」にし、〈その同一の原因が、氏の「叛逆性」をその芽生えとして触発した。〉(氏と氏の環境との戦ひ)において、氏は「超俗性」から「叛逆性」への道を進んでいる。ここで「叛逆性」の性質が「郷土望景詩」十篇に盛られたかなしい憤怒の素性が決定される」と説明している。また中野は「自身の手言に就いて見るならば」としたうえで、

「私情操の中では、二つのちがつたものが衝突して居る。一つは現実におつつかつて行く烈しい気持で、一つは現実から逃避しやうとする内気な気持だ。」そして「氏が同志と呼び、親しき友情を感じ得るものは、今の文壇でただ無産階級派の作家あるのみだ。彼らの仲間だけが、よく私の氣質を知り、私の思想を了解して居る。」と言はれるにも拘らず、「尤もプロレタリア作家といふ中には、社会主義者の一派も居るが、彼らは私にとつて例外である。社会主義そのものは、精神的に私と気が合はない。彼らは私の敵であつて仲間でない。私が言ふのはアナキストの一派であり、或はニヒリストの一派であり、或はダタイストのことである。」(傍点は私が打つた。)

と朔太郎は言つていと書き、朔太郎に次のように反論、批判する。

私達の解する限り、無産階級派の作家とは、有産者團を無くすことによつて無産者團を無くさうとする作家だ、かゝる意志なき作家、たゞ一人の無産者である作家は、それは貧乏作家だ。また私達の解する限り、社会主義とは、無産者團による有産者團覆滅の科学だ。そして科学は気分の如何に関心しない(その気分を解明しはするが)。従つて私は、前の二つの氏の言葉の間の矛盾を、氏の社会主義に対する喰はず厭ひに帰せしめようと思ふ。そしてまたアナキストやニヒリストやダタイストやに対しては、氏は喰はず好きなのだと思ふ。

とし、そこにある感情は小市民的なそれであると断言する。氏の「戦ひ」への仲間が社会主義者であり、社会主義者こそ氏の味方であり、氏の敵は別のあるものであることを理解されるためには、氏に取つて、たゞ一步を踏み出されるだけで充分ではないか? 「戦ひ」への意志がある、と言ふことが重大なのではなく、如何なる「戦ひ」への意志があるか、重大なのである。と萩原朔太郎に訴えている。この評論の趣意は、萩原朔太郎に社会主義へ向けて連帯意識をもつて詩作するよう要請していることになる。

この中野の評論を読んだ芥川龍之介は「萩原朔太郎君」で「萩原朔太郎君の「純情詩集」のことは「驢馬」の何月号かに中野

重治君も論じてゐる」として

中野君の論文は社会主義者の視点から萩原君の詩を論じたものである

と批評態度を断じている。芥川は病的に鋭い感覚を自由に表現した詩人と見、韻律や「情熱を思想に錬金する」詩人と捉えている。また室生犀星の『抒情小曲集』と比較して、

僕も「純情詩集」を読んだ時、前橋の風物を歌ひ上げた詩に沈痛と評したい印象を受けた。同時に又「月に吠える」、「青猫」等よりも萩原君の真面目はここにあるかも知れないと云ふ印象を受けた。では萩原君の真面目は何かと言へば、それは人天に叛逆する、一徹の詩的アナアキストである

と断言する。芥川の詩人朔太郎観は、郷土に対して主観の思いを訴える、叛逆の精神と気骨の表現化、表現技巧や韻律の効果について批評したもので、表現の効果性の基底に萩原朔太郎のアナアキな精神を捉えている。社会主義の意識に立つて歌えと萩原朔太郎に道義性を告げる中野重治の批評態度とは大きな径庭がある。芥川が萩原の『郷土望景詩』を読んで「悲痛な感動」を覚えて、顔も洗わず、朝寝姿で萩原の宅を訪ねたことを、『芥川の死』（昭和二・九、「改造」）で萩原朔太郎が書いていることは、よく知られていることである。郷土で狂人のごとく見られ、孤独な精神と、反俗への怒りを発した朔太郎の創造の詩に、芥川は芸術の真価をみて共感を覚えたのである。

こうしたことから観じるとは、芥川が『文芸雑談』のなか

で中野重治の詩を（プロレタリア作家の作品の様に精彩を欠いたものではない、どこか今迄に類少い、生ぬき的美を具へて居る」と評価したのは、中野の詩の表現のカーイメージを芥川は注視していたのである。あの「お前は赤ま、の花やとんぼの羽根を歌ふな」と歌ふ「花」や「とんぼの羽根」に託される凍とした詩的イメージを、その詩的表現方法に、自然主義や口語自由詩に見ない、新鮮な「生ぬき的美」をかきとっていたのである。作品の思想性に力点をおいて中野重治を評価したのではないのではないか。『北見の海岸』に歌った、手綱をあげ獲物をたずねてゆく緊迫した「黒い人影」に象徴されたイメージ、真夜中になって、みんな眠ってしまっているのに、突然「ちい」と言うて鳴く／＼じつに馬鹿だ」と歌う『ま夜中のせみ』（第三号、大正一五・六・一）の、ユーモラスな愚直の様を想像させるイメージなど、生活を、人生を喚起する、そのような詩的方法に芥川は新鮮な詩美を見出しているのである。そうした中野の詩的表現を胎する精神に期待を寄せていたのであろう。

中野は昭和二九年「群像」に連載した小説「むらぎも」のなかで、「驢馬」の仲間や、葛飾伸太郎の名で芥川龍之介を描いている。一月の末に（昭和二年一月か、菊地）葛飾に会いに行った安吉（中野）の印象は、葛飾の才能についての自己卑下の態度に軽蔑を覚えたことなどを描いている。社会主義思想を奉ずる人間と、芸術の美に賭ける人間との齟齬は明白であることが知られる。

註1 堀辰雄は「浪」を「波」と書いている。

註2 昭和五八・五・二五、中央公論社。表記は現代仮名遣いになっている。この書に「豪傑」にふれた書簡があることを島田昭男氏に教えられた。

註3 『中野重治詩集』（昭和二三・七・一〇、小山書店）より引用。

註4 註3の詩集による。木村幸雄氏は『中野重治 詩と評論』（一九七九・六・一五、桜楓社）において、中野「豪傑」は萩原朔太郎「僕の親分」を意識し、「機関車」は朔太郎「軍隊」を意識して生み出された詩ではないかと指摘し、論じている。

註5 北川透著「近代日本詩人15 中野重治」（一九八一・一〇・二五、筑摩書房）

註6 この論を芥川龍之介が読んだことは芥川の「萩原朔太郎君」（大正六・一「近代風景」）でわかる。

註7 芥川龍之介は『文芸雑談』のなかで中野の詩に「生ぬきの美を具へて居る」と評価して、（尚次手に一言すれば、僕は近頃中野氏が久米正雄の「万年大学生」に対し、万年小僧よと云って居る詩を読んだ。然し久米はあの作品の主人公が、詩集者になつたのを軽蔑して居る次第ではない。それを万年小僧よときめつけられては久米も迷惑に思ふだらう。斯ういふのは久米への会釈ではない。久米は僕等の間では当時の詩集的感激を一番もつてゐた大学生だった。そんなことを考へると、今昔の感に堪へないから一寸附け加へる氣になつたのである。）といっている。

註8 「註5」と同じ。

註9 「註5」と同じ。

註10 堀辰雄『幼年時代』の「赤ままの花」（堀辰雄全集第三巻）、昭和二九・七・一五、新潮社）

付記 馬渡憲三郎氏は「昭和詩の成立」「昭和詩の展開」（昭

和詩史への試み 表現への架橋）一九九三・三・一二、朝文社）の中で「驢馬」掲載の中野の『詩に関する二三の断片』をとりあげ、中野の提起していることが昭和の詩史を

考える上で重いことを述べている。すなわち「歴史的使命を自覚させる無産階級の意識」と「微小なるものへの関心」を結びつけることを目指したとし、中野がマルクス主義芸術の方向づけをしたと評価している。